

第77回二松学舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十年七月四日(土)
場所 千代田校舎二〇六教室
三〇六教室

講演

実学と誠の再発見

——朝鮮実学と21世紀を介して——

東京大学教養学部教授 小川晴久 先生

研究発表

《国文学》

『十六夜日記』題名考

博士前期課程 二年 下 浅 千穂

一体、古典は書写され、伝えられてきた諸本によって、読むことができる。現在私たちは、『十六夜日記』を文学作品として呼んでいるわけであるが、作品に対する評価や解釈は一応定着されてきているものの、書写される過程に於いて、はたして『十六夜日記』はどのように受け取られてきたのであろうか。この点について、諸本に付けられた題名の違いから考え直してみたい。

例えば、永青文庫本では『いさよひの日記』、九条家本では『阿佛

記』、静嘉堂文庫本では『阿仏房紀行』、などとなっている。これらを見ると、この作品の題名は作者阿佛自身が付けたものではない、ということがわかる。これは、書写者の読みのあらわれではないであろうか。細川幽齋はどう読んだのか。池田光政はどう読んだのか。様々な題名が付けられている。

ではなぜ、『十六夜日記』に定着したのであろうか。作者内容から、『十六夜日記』と読み取ったのは、一体どういった所を問題としたのか。このような事について、考察してゆきたい。

「好色五人女」巻五の特異性

博士後期課程 一年 岡 田 純 枝

「好色五人女」巻五「戀の山源五兵衛物語」は他の四巻同様、実際に起こった事件をモデルにして書かれたものである。しかし。その内容は非現実的で他の四巻とかなり様相を異にしている。巻五については、これまでも男色が全面に描かれていること、結末が悲劇的でないことなどからは、他の四巻との相違が述べられていた。しかし、それらについては、巻四の五で吉三郎の兄分が登場することに